

等位接続構造からみた位相

(シンポジウム『位相を再び考える』)

山村 崇斗

等位構造制約と操作の Across-the-Board 方式での適用

(1)の等位構造制約 (Coordinate Structure Constraint: CSC) は、(2)のような等位構造内の等位項の片側から要素を抜き出すことができない事実には効力を発揮するが、(3a)のように全ての等位項に一律に抜き出し操作がかかる (全域一律 (Across-the-board: ATB) 方式の) 場合には適用されず、実際のところ、(3b)のように非 ATB 方式の片側抜き出しの事例が容認されうることも報告されている。

- (1) **The Coordinate Structure Constraint:** In a coordinate structure, no conjunct may be moved, nor may any element contained in a conjunct be moved out of that conjunct. (Ross (1967: 161))
- (2) a. * The nurse [who __ polished her trombone and the plumber computed my tax] was blonde.
b. * The lute [which Henry plays __ and sings madrigals] is warped. (cf. Ross (1967: 160))
- (3) a. Wo do Democrats love __ and Republicans hate __? (Goldsmith (1985: 134))
b. How many courses can we expect our graduate students to teach __ and (still) finish a dissertation on time? (Goldsmith (1985: 133))

このような事例に基づき、CSC の理論的位置づけについて、これまで統語的、意味的観点で様々な論じられてきた。本稿では、等位構造内部への外部からの干渉が基本的には許されているという立場を採った際に、等位構造の統語構造や CSC の効果、そして位相といった概念がどのように関わっているかについて考える。

等位構造と位相性

等位構造と要素の抜き出しに関する言語事実を位相理論の下で説明する試みとして、等位接続詞が位相主要部で、等位構造全体を位相だとする Oshima and Kotani (2008)や、等位項それぞれを位相とする Bošković (2020) がある。位相理論では、要素の移動には位相端の利用可能性が不可欠な要因といえるが、Oshima and Kotani (2008)では、位相端の定義を精緻化することで、等位構造には移動の中間着地点として機能できる位相端が存在しないという提案がされている。また、等位項が位相だとする Bošković (2020)の分析では、等位項内部の要素が移動する際には、(4)のように、等位項の位相端を経由しなければならないが、それによってラベルの決定不全が起これ、(4a)のように非 ATB 式に片側抜き出しが起きた時には、等位構造に求められる等位項間の均質性が保てないことが問題だとされている。反対に、(4b)のように ATB 式に移動が適用されれば、どちらの等位項もラベル決定不全状態であるという点で均質性が保たれ、そのために文法的になると考えられている。

- (4) a. * Who_i did you see [ConjP [₂ who_i [DP enemies of ___i]] and [DP John]]
b. Who_i did you see [ConjP [₂ who_i [DP friends of ___i]] and [₂ who_i [DP enemies of ___i]]] (cf. Bošković (2020: 138); emphasis mine)

このように、CSC の効果を統語論の問題として扱う試みでは、非 ATB 式の片側抜き出しを排除することが重要で、(3b)のような事例を扱おうとすると、さらなる工夫を余儀なくされることになる。

等位構造からの片側抜き出しへの意味論的アプローチ

CSC を意味論の制約とする研究では、非 ATB 式の片側抜き出しの容認可能性には等位項間の意味関係が関わると論じられている。例えば Lakoff (1986)は、等位項が(5)に挙げたシナリオに沿っていることが片側抜き出しの成否に関わっていると論じている。

- (5) a. Type A: The sequence of events fits normal conventionalized expectations.
b. Type B: A conventionalized expectation is violated. (cf. Lakoff (1986: 153))

同様の指摘は Zhang (2010)にもみられる。Zhang (2010)によれば、等位構造は(6)に挙げた *Relatedness* か *Resemblance* のどちらかの意味関係に分類され、前者の意味関係で解釈される等位構造でのみ非 ATB 式の片側抜き出しが可能であると指摘している。

(6) **Relativized Parallelism Requirement**

Conjuncts of a coordinate complex must hold a coherence relation in terms of:

- a. *Relatedness*: they must be related to each other semantically, as in natural coordination, or
- b. *Resemblance* (Parallelism Requirement): they must hold a resemblance relation in terms of both their semantic type and their dependency chains. (Zhang (2010: 181); emphasis mine)

片側抜き出しの単一事象条件に基づく分析

要素の抜き出しと意味解釈との関連性については、Truswell (2011)の付加詞からの抜き出しの分析がある。(7)の文法性の違いは、(8)の条件によって説明される。

- (7) a. What did John drive Mary crazy [whistling ___]?
b. What did John die [whistling ___]?
c. * What does John work [whistling ___]? (Truswell (2011: 30))

(8) **The Single Event Condition** (first approximation):

An instance of *wh*-movement is legitimate only if the minimal constituent containing the head and the foot of the chain can be construed as describing a single event. (Truswell (2011: 38))

(6a)のタイプの等位構造からの片側抜き出しが可能であるという Zhang (2010)の観察は、最終的に(8)に帰着すると考える。また、単一事象を表すものとして等位構造を捉えられるか否かは、等位項が位相 *vP* か非位相 *VP* かによるとする。なお、Chomsky (2021)に従い、等位項間の均質性は FORMCOPY と FORMSEQUENCE の結果によって評価されると考える。

- (9) a. Who do Democrats love ___ and Republicans hate ___? (Goldsmith (1985: 134))
b. [CP Who ... & [? who [? Democrats [v*P v* [VP love who]]]]
[? who [? Republicans [v*P v* [VP hate who]]]]
- (10) a. What did Harry go to the store and buy ___? (Lakoff (1986: 152))
b. [CP What ... [? what [? Harry [vP v [& [VP go to the store]]]]
[VP buy what]]]

(9)では位相 *vP* が等位接続されており、この場合はそれぞれが独立した出来事を表していることになる。また、等位項毎に位相端があるため、それぞれの位相端に対して *wh* 移動が適用される。FORMCOPY は位相 *v*P* の位相端にあるふたつの *who* を標的とし、結果として FORMSEQUENCE の求める均質性が満たされることになる。一方、(10)のように非位相 *VP* が等位接続されている場合には、位相 *vP* はひとつしかないので、単一の出来事を表していると考えられる。FORMCOPY の標的もひとつで十分であり、それにより形成されたコピー関係は FORMSEQUENCE が求める均質性に何ら影響を及ぼさない。そのため、一見すると排除されるべき非 ATB 式の片側抜き出しであっても文法的と認められる事例を理論的に導き出すことができる。

主要参考文献

- Ross, Robert John (1967) *Constraints on Variables in Syntax*, Ph.D dissertation, MIT.
Goldsmith, John (1985) "A Principled Exception to the Coordinate Structure Constraint," *CLS* 21, 133-143.
Lakoff, George (1986) "Frame Semantic Control of the Coordinate Structure Constraint," *CLS* 22 (2), 152-167.
Bošković, Željko (2020) "On the Coordinate Structure Constraint, Across-the-Board-Movement, Phases, and Labeling," *Recent Developments in Phase Theory*, ed. by Jeroen van Craenenbroeck, Cora Pots and Tanja Temmerman, 130-182, Walter de Gruyter, Berlin/Boston.
Zhang, Niina Ning (2010) *Coordination in Syntax*, Cambridge University Press, Cambridge.
Truswell, Robert (2011) *Events, Phrases, and Questions*, Oxford University Press.